

『哲学の探求』第35号刊行にあたって

広辞苑で「探求」を引くと、「ある物事をあくまでさがしもとめようとすること」とある。——あくまで、とある。よもや、広辞苑にかくも情念的な言い回しが用いられているとは思ってもよらなかったが、そう言われてみると「哲学の探求」とは、たしかに「あくまで」の探求であったかとひとつ気づかされる。

『哲学の探求』は、毎年開かれる哲学若手研究者フォーラム（略して若手フォーラム、旧名称は全国若手哲学研究者ゼミナール）の記録であり、成果を収めた雑誌である。今号掲載の論文は、すべて2007年7月21, 22日に開催された2007年度と同フォーラムにおける、テーマレクチャーならびに個人研究発表がその基となっている。テーマレクチャー「分析哲学における存在論の現在」では、伊佐敷隆弘（宮崎大学）、柏端達也（千葉大学）、加地大介（埼玉大学）各氏に講演をいただき、最先端の研究の一端に触れる得がたい機会となったが、さらにその成果は論文として結実し、幸運にも今号に収録することができた。さらに、同フォーラムでなされた個人研究発表から、計6本の論文が生み出され、今号に収録されることとなった。大学院生を主な執筆者とするこれらの論文からは、沸々と滾るような哲学の若く熱い血潮を見出す読者も決して少なくはないだろう。

さて、今号を紐解く読者に、特に注意していただきたいことがひとつある。それは、個人研究発表論文のうち、最後の二つ、土屋論文と成瀬論文は、実験的に催されたワークショップ企画「ストラウド vs. クワイン——ストラウドのクワイン批判をめぐる——」の成果でもあるということである。それも、単に同じひとつの主題について複数の論者が自論を述べるというだけのものではなく、「問いかけと応答」を形式ばかりのものとはせず、互いに協調的な態度をもって終始「噛み合った議論」を目指すという——読者諸氏も覚えがあるだろうが——志も高ければ困難も深い試みの記録なのである。当日の企画では、成瀬氏の提題に対し、土屋氏が批判を試みることから議論は出発した。今号では逆に、土屋氏の議論に成瀬氏が応酬を試みるのが意図されており、したがっ

て両論文はその順で収録されている。両論文はそれぞれ単独で読んでも十分意義のあるものであるが、この順序のもつ意味に留意しつつ読むことで、またひとつ新たな理解が得られるものと期待される。

さて、2008年度の若手フォーラムは、2008年7月19、20日に東京代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて開催が予定されている。詳細は今号137ページに案内があるのでそちらを参照してほしいが、1泊2日という短い日程のなかにテーマレクチャーや個人研究発表、あるいは延長戦と言える懇親会などがひしめきあい、哲学的に濃密な時空間を形成するところに特徴がある。2008年度のテーマレクチャーは「スピノザとライブニッツ」であり、上野修（大阪大学）、松田毅（神戸大学）、山内志朗（慶應義塾大学）の三氏をお招きし、時間を贅沢にとったセッションを予定している。（今号139～147ページおよびホームページ <http://www.wakate-forum.org/>に三氏の講演要旨を掲載。また、ホームページには個人研究発表の予稿も掲載。）参加、あるいは発表するにあたって必要な資格は一切存在しない。興味をもたれた方の参加を切に希望する。

「あくまで」は、「飽く迄で」であろう。つまり、「飽きるまで」という範囲を限定するための表現であるが、我々が「あくまで」と言うときにはむしろ限定などないということが意図されている。つまり、「あくまで」と言うときには「飽かない」ことが暗に示唆されていると言える。

しかし、それだけでなく、「あくまで」という言葉には、単に「飽かない」ということ以上の積極的な何かが込められているのではないだろうか。今号が読者諸氏の「あくまで」の一助になればこれ以上の幸いはない。

2008年4月清明

2007年度世話人総務担当かつ『哲学の探求』35号編集

荒磯 敏文